

<書評と紹介> 山口覚著 『集団就職とは何であったか : <金の卵> の時空間』

Nakazawa, Takashi / 中澤, 高志

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

697

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

63

(発行年 / Year)

2016-11-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013514>

山口 覚著

『集団就職とは何であったか』

——〈金の卵〉の時空間』

評者：中澤 高志

本書は、表題が示す問題意識に対して、膨大な資料の丹念な分析によって答えようとした労作である。概要を知りたいが、通読する時間はないという読者には、本書の最終章を読むことをお勧めする。そこには著者によって本書の要約と残された課題が手際よく提示されている。そこで本稿では、集団就職（者）に対する著者の認識や理解が示された前半部について、評者の解釈を交えつつ検討することに紙幅を割くことにする。

序章「集団就職の時空間」では、本書の目的の提示に先立ち、著者の集団就職に対する認識が提示される。まず、集団就職に対して、「主に戦後・高度経済成長期に公的機関の諸制度によってもたらされた、新規中卒就職者を中心とした大規模な若年労働力移動現象および関連現象（p.1）」との定義が与えられる。「中心とした……および関連現象」とあるのは、集団就職を孤立した特異な現象・制度とみるのではなく、労働力移動の多様体の一部として理解しようとする、著者の姿勢の表れである。

著者によれば、「集団就職は、一部のイメージを残しながら、実体のほとんどを忘却されてしまっている（p.3）」という。残影としての一部のイメージは、『まなごしの地獄』のN-N

こと永山則夫が象徴するような、高度成長期の暗部としてステレオタイプ化されつつある。永山の処刑に、高度経済成長が生んだ闇を意図的に消し去ろうとする国家の意志を嗅ぎ取る向きもある。著者は、「集団就職は『日本国家』とだけ結びつけて記憶されればよいのであろうか。あるいは集団就職は『恥ずかしい』としか評価できないシステムだったのであろうか（p.6）」と問いかける。

本書の目的は、支配的言説にとらわれず、「集団就職と呼ばれる労働力の配分・移動現象が、歴史的・空間的にいかに進展してきたか（p.9）」を明らかにすることにある。注目すべき点は、集団就職を「高度成長期」と「国土」という特定の「時期」と「領域」に押し込めるのではなく、より広い時空間に概念的に適用させる視点を、著者が有していることである。これは、集団就職を労働力移動の多様体の内にとらえる著者の姿勢とも関わる。

第I部「ナショナル労働市場という夢と集団就職制度」は概論であり、2つの章からなる。「労働市場の運動と集団就職の諸制度」と題する第1章は、本書の分析枠組みを理解するうえで重要である。集団就職に関しては、経済学や社会学における一定の研究蓄積がある。集団就職という同じ対象を扱うのであるから、本書の独自性は、分析対象ではなく、よって立つディシプリンすなわち地理学の分析視角に求められる。一言でいえば、それは労働市場の空間性に着目することにある。

著者がいうように、「ナショナル労働市場とは、日本全体での労働力需要を整合化させようとする人々が創り出そうとする労働市場の理想形、『夢』の『形象』（p.14）」である。擬制商品である労働力は、労働者と不可分であるから、日常的な労働力の流通は本質的に限られた範囲に限定される。住居をはじめとする生活基

盤の土地固着性などから、転職もまた大半がローカルな空間で行われる。しかし、そうした労働力の固着性は、生産要素の自由な移動を求める資本にとっては制約に他ならない。

新規学卒労働市場においては、集団就職という現象形態をとって労働力が移動する制度が構築されることによって、ナショナル労働市場はかろうじて「夢」ではない「形象」たり得た。しかし、労働力を扱う限りにおいて、労働市場の構築は常に未完のプロジェクトであり、「その夢を実現しようとする人々によって実現に向けた努力が不断に (p.14)」必要とされる。著者は、労働市場を、「労働力需給関係を生成させるための固定化された所与の舞台ではなく、「関係する機関や人々が労働力需給関係を反省的にとらえ直す作業を通じて、つねに新しく作り直されていく場 (p.15)」をとらえる。読者の多くは、地理学を地表の一切片としての地域を対象化して記述する学問と考えるかもしれないが、事象の空間性に注目しつつ、それを実体論的ではなく関係論的に、beingよりもbecomingの地平において認識しようとするのが、近年の地理学の潮流である。

著者は、ナショナル労働市場を閉じた空間と見なさず、ローカルを含みつつグローバルに開かれたものと認識する。ナショナル労働市場の構築は、一元化された制度なくしては達成できない。しかし、諸制度が運用される現場では、ローカルな諸主体がそれぞれの思惑に沿って行動し、かつ主体間の信頼関係や慣習が行動に影響することを、著者は見逃さない。ナショナル労働市場は、制度的にみても均質空間ではないのである。そして第8、9章で論じられるように、集団就職という制度、より正確にはその背景にある若年低賃金労働力を希求する衝動は、ナショナルを踰越する。ここでは、地理学の重要な概念である空間スケールが、重層のかつ関

係論的に認識されている。

分析視角を設定した後、著者は集団就職という言葉の含意に切り込んでいく。集団就職という言葉によって想起される時期は、研究者によって異なる。制度的にみても、広域職業紹介制度、集団赴任制度、集団求人制度という別々の制度が、集団就職として認識される現象を支えていた。これに加えて需要側の求人開拓、供給側の求職開拓も、ローカルな動きとして注目すべきである。さらには、集団就職者の集合的表象が、集団就職という言葉に新たな意味を付与する。こうした概念の不確定性を前にして、集団就職の領域画定をするのではなく、むしろそれに連なる広範な現象に関する事実を拾い集めることが本書の目的である。

第2章「高度経済成長期における集団就職の概要」の前半では、集団就職の移動空間が概括される。新規中卒労働市場における東京都と大阪府のテリトリーは、東西にくっきり分かれる。一方愛知県は、就職者を介した九州や北東北とのつながりが特徴的である。愛知県は、早い段階から労働力供給県に対して求人開拓を行っており、そうして生じた制度的連関が、労働力市場の空間性を複雑にしている。第2章の後半では、集団就職者が客体化された労働力であることを自ら見出すという実存的な問題が論じられる。とりわけ、次第に進学率が上昇していく中であって、集団就職者たちがコンプレックスを強めていったことが重視されている。

第Ⅱ部をなす第3章「戦時下の集団就職」、第4章「戦後における集団就職の展開」は、いずれも就職列車を基軸として集団就職の制度史を描く。第3章の舞台は秋田県であり、当地から上野に向けて運行された日本初の専用臨時就職列車に焦点がある。著者はこの列車の計画に、「戦時体制下におけるナショナル労働市場の確立を目指す動き」を看取るとともに、そ

こには「人身売買の解決という意味も含まれていた (p.117)」と論じる。1930年代の秋田県では、凶作による人身売買が頻発しており、それに対する保護という側面をもって職業紹介制度が組織化されていった。1938年になると、職業紹介所が国営とされ、労働力需要地域を中心とする募集ブロック制が敷かれた。日本初の専用臨時就職列車が運行されたのは、この年のことである。

1940年代に入り、鉄道による「少年産業戦士」の輸送は制度として確立する。戦時体制下の労働力不足の中にあって、銃後の「戦士」たちは大企業志向を強めていた。加えて、農村部でも賃労働の機会が増加していたため、愛国心に訴求して労働力移動を促すことが必要であったという。さらに著者は、国家の論理が貫徹された戦時体制下においても、若者が「潜在的に職業選択が可能な主体であり得た (p.122)」と主張する。戦争末期には組織的な労働力移動は瓦解したが、その遺産は戦後に引き継がれることとなる。

第4章では、戦後初の就職臨時専用列車とされてきた「一九五四年青森発上野行き」の脱神話化をモチーフとしながら、戦後の集団赴任と計画輸送の変遷を辿る。著者によれば、戦後初の就職臨時専用列車が運行されたのは、正しくは1951年のことである。その一つである「織姫号」にまつわる諸資料を発掘したことは、集団就職史に対する本書の重要な貢献である。1950年代半ばになると、就職列車は順次各地から運行されるようになる。戦後初と喧伝されてきた「一九五四年青森発上野行き」は、その一つに過ぎない。1962年には、各県が別個に実施していた集団赴任が、全国一律の計画輸送制度に一元化された。計画輸送は鉄道のみならず、船や飛行機を使う場合もあり、また新規高卒者を輸送する場合もあった。計画輸送制度は

1975年に廃止されるが、集団赴任自体はその後も細々と続いていく。

第Ⅲ部をなす5つの章では、集団就職を労働力移動の多様体の中に位置づけようとする著者の試みが具現化される。第5章「人身売買から集団就職へ」では、神話の地位から退位させた「一九五四年青森発上野行き」を再び取り上げ、人身売買をキーワードに、それが祀り上げられてきた背景を探る。著者は、人身売買を「不当雇用慣行」ではあるが、「広域職業紹介制度と競合しつつ併存していた (p.186)」一種の職業紹介システムと見なす。1953年、秋田県は大凶作に見舞われた。広域職業紹介制度が成立していたとはいえ、その時点の青森県は東京の労働市場に十分包摂されてはならず、食い扶持を求めて身売りする悲劇が続出した。凶作からくる人身売買に対する危機感が、行政関係者をして求人開拓と職業紹介の強化に奔走させた。「このような状況にあって、青森県で就職列車が計画されたとしても何ら不思議はないはずである」というのが著者の見立てである。しかし、著者も吐露するように、凶作による人身売買の増加と「一九五四年青森発上野行き」の関連を直接的に示した資料は、残念ながら (p.196) 示されていない。

第6章「集団就職と県民性」では、「自県民が労働力としていかに優れているかを需要側に示すことで、より多くの求人数を確保しようとする (p.206)」実践が分析される。それは、事実上「優秀」の意味論となっている。県民性を持ち出すことは、一種の差別化戦略であるが、勤勉とかねばり強さとかいう「『優秀』な県民性とは、雇用者に従順で没个性的な労働者像そのものである (p.224)」することに、まずもって矛盾がある。本質的差異に基づかない「優秀」さによって「県民性」を謳い続けるには、「厳選主義」によって「優秀」と認定される人

を需要地に送り続ける必要がある。後に続く若者のために「優秀」な県民性という評判を勝ち取り続ける必要があるからである。

没個性的な労働者として「優秀」であるためには、権力の下で規律を内面化することで、常に自己を「優秀」な労働者に保つ、いわばフーコー的な「優秀」さが求められる。ここでの「優秀」さは、特殊な能力や性質によって認定される「優秀」さとは異なる。「耐熱性」があると見なされた鹿児島県出身者は、高度経済成長が本格化する以前、鉄鋼業など耐熱作業の特殊工員として、大企業に重用されてきた。しかしフーコー的な「優秀」さが求められる求職難の時期にあっては、多くの出身者が大企業に就職した歴史は、県人の「優秀」さの証としてではなく、そこに安座することへの自戒の対象に転化する。

第7章「集団就職と都市イメージ」では、「労働市場においては、移動先である自治体の福祉政策や場所をめぐる情報・イメージが相応の意味を持った (p.237-238)」という事実を踏まえ、尼崎市のアクターが魅力ある地域を演出しようとしてきたプロセスが分析される。1960年代、兵庫県は労働力確保の施策において大阪府に後れを取っており、尼崎市の関係者は不満を持っていた。そのことは、尼崎雇用対策協議会の設立につながり、西日本を中心に求人開拓が行われた。求人の隘路となったのが、尼崎市に対する「暴力の町」というイメージであった。イメージ刷新のための施策の多くは空振りに終わったものの、福祉の重要性に目が向けられたことは評価できる。1960年代半ばからは、「公害の町」というイメージが問題となる。またも五月雨式に施策が打たれたが、尼崎市は公害問題を解消できないまま、高度成長期の終焉を迎えることになった。

第8章「海外移住としての本土就職」は、集

団就職における復帰前沖縄の位置づけと、そこでの諸主体の実践を分析している。沖縄から本土への集団就職が定着するまでには紆余曲折があった。1961年、アメリカ政府は本土への集団就職の中止を命令した。表向きの理由は未成年者の保護であったが、実際は日琉隔離政策の一環であり、復帰運動への横槍であった。沖縄の労働行政と人々はこれに反発し、日本政府はこの命令にただちに非難声明を発表した。日本政府の対応には、「潜在主権の確認という意味も込められていたはずである (p.289)」と著者は主張する。

本章の後半は、沖縄出身者にとっての本土就職の意味が論じられている。観光気取りで本土に就職し、所期の目的を果たして離職・帰郷する例もあったとはいえ、多くの沖縄出身者は期待と現実のギャップに苦しんだ。そのギャップを狭めようと、南米移民の経験を援用した合宿訓練やマニュアル作成までもが行われた。それは、「日本人」として扱われない本土の現実の中で、沖縄出身者がアイデンティティの問題に直面したことを暗示する。

第9章「集団就職と韓国人研修生」において、著者は集団就職の射程を沖縄よりもさらに延長させようとする。高度成長期たけなわの人手不足の時期、海外からの労働力導入の可能性が検討されるようになったのは、自然の成り行きであった。著者は断片的な資料から、全国各地において、様々な形で韓国人研修生の導入が模索され、あるものは実現をみた事実をあぶりだしていく。しかし、労働省が事実上の低賃金労働力としての導入を警戒したこともあり、民間による韓国人研修生受け入れは、多い年でも年300人を越えなかった。高度成長期に導入された外国人労働力は、大海の一滴といってしまうそれまでであるし、他の章に比べて資料の断片性は否めない。それでも、沖縄の事例を中

間項に配して、制度的には別々であるとしても、労働市場の空間的拡張によって求人難に対処しようとするコロニアルな発想において、集団就職と外国人研修生制度に連続性があるとみた著者の構想力は評価したい。

終章「集団就職を問い直す」では、本書の要約に続き、より広く深い資料の収集と、かつての集団就職者自身の語り^{ナラティブ}をもって、集団就職にまつわる支配的言説^{マスター・ナラティブ}のさらなる乗り越えを図ることが、今後の課題として挙げられている。

本書は理論的な裏打ちが若干弱い^が、埋もれた記憶・記録の掘り起こしを優先した研究とすれば許容できる。緻密な資料分析とは対照的な論理の飛躍に違和感を覚える箇所もあったが、そうした飛躍の論理によってこそ、認識論的障害の飛越が可能になることもあると考えたい。指摘しておきたいのは、集団就職者の語りに基づかない本書は、「集団就職者とは誰か」という問いについては、もとより十分に語りえないという点である。著者は集団就職者の実存的問題にしばしば言及し、随所で『まなざしの地獄』に言及している。永山が疎外感と絡めて集

団就職者を自任したことは確かである。しかし、ことさら永山を持ち出すことが集団就職にリアリティを持たせるためのレトリックであるとしても、それ自体、著者が論難した集団就職者のステレオタイプ化につながってしまう恐れがある。「集団就職者とは誰か」という問いについては、本書では禁欲的に沈黙し、集団就職者の生の声と表象された集団就職者とを対置させる形で、今後の研究において存分に語る、という戦略も採りえたと思う。

本書の登場によって、「集団就職とは何であったか」という問いに紋切り型の回答を与えることはますます困難になった。そのことは、著者の研究目的、すなわち、支配的言説の脱構築が成功裏に達成されたことを意味する。集団就職研究の新たな基本的文献が、ここに誕生したのである。

（山口覚著『集団就職とは何であったか——〈金の卵〉の時空間』関西学院大学研究叢書第176編、ミネルヴァ書房、2016年1月、x + 371 + 20頁、定価4,800円+税）

（なかざわ・たかし 明治大学経営学部教授）